

残念だが、これで終わったところではない！

【訳者注】The Saker の考え方は、私の「狂気をもって狂気を制するか、トランプ大統領」などに、かなり近いと思われる。トランプは、こんな戦争は無意味だと口では言えないので、それが無意味であることを、キチガイじみた行動によって証明した。The Saker の言う通り、「トランプは正しかった。」しかし、もう一人の論者 P・C・ロバーツも言うように、これで終わりになったのではない。彼らは、自分たちの世界制覇計画が、無意味であった（「幻想の帝国」であった）ことが証明されるまで、徹底抗戦するはずである。それは、論者も言うように、「論理的」な戦いではない。戦うのは彼らだが、それは「曲がった線を用いてまっすぐに書く」神の戦いでもある。だからこそ、すべてが芝居じみて見える。彼らの繰り返すニセ旗作戦のからくりは、誰でもわかっているが、そうは言わないことになっている。この論者の言い方で言えば、「ロシアとイランを除いて、我々はゾンビのように彼らに従っている。」我々日本人も、完全にこのゾンビの一員で、地上のすべてのゾンビが、自分がサタンに仕えていたことを認めるようになるまで、この戦争は続くであろう。

The Saker

April 16, 2018, Information Clearing House



アングロ・シオニスト世界制覇は、惑星全体にとって脅威である。しかし、ロシアとイランの他に、誰もこれに立ち向かおうとする者はいない――

出来事の簡単な要約から始めよう――

- ・約1か月前に、ニッキ・ヘイリーは国連安保理に対し、アメリカは、万一、シリアで化学攻撃が起これば、まさにこの同じ国連安保理のルールを、破る用意があると通告した。
- ・それからロシア人たちは、ニセ旗化学攻撃が、シリアで用意されつつある証拠をもっている」と通告した。
- ・それから化学攻撃（と言われるもの）が起こった（政府軍に囲まれ、基本的に政府軍が支配している場所で！）。
- ・OPCW(化学兵器禁止機構)が調査団を送った（西側国家が、どんな調査団も必要がないと、大声で宣言したにもかかわらず）。
- ・アングロ・シオニストが、そこでシリアを爆撃した。
- ・次に、国連安保理は、自分自身のルールと決定が破られたことを、非難することを拒否した。
- ・最後に、アメリカ人たちは、これは“完全な攻撃”だったと言った。

では言ってほしい——あなたは、この件はこれで終わったと感ずるか？

もしあなたが、32/103 議案は、完全とはいえないと言うなら、あなたはポイントを見逃している。実は、32/103 議案は、再び爆撃を行う誘因にほかならない！

この事件を少し別の角度から見て、こう問うてみてほしい：——アングロ・シオニストの攻撃は、現実には何を証明したのか？

- ・西側の一般大衆は、今や、あまりにも末期的にゾンビ化されているので、ニセ旗攻撃は、4週間も前に予告することができる。
- ・ヨーロッパ人は、今、「わが名誉は連帯と呼ばれる」というモットーによって生きている（ヒトラー親衛隊の「わが名誉は忠誠である」のもじり）。
- ・アメリカに導かれた西側諸国は、彼ら自身の国法を破って始められた戦争に、反対することができない。
- ・国連安保理は、国連憲章や国際法を破って始められた戦争に、反対することができない。
- ・中国のリーダーたちは、彼らの無限の知恵を見せて、自分たちには何の個人的な利害もないというように、傍観者として行動している。
- ・イスラエル人は、国連のネオコンを通じて、現在、この**帝国**を完全に支配しており、それを利用して、隣の家の“大掃除”をしようとしている。

と言うと、私には反対意見が聞こえてくる。それは、ざっとこんな問答になるだろう——

—しかし、この攻撃は悲惨な失敗だったではないか！

—それがどうした？ 帝国は、それをやったことによって、どんな代価も払っていない。

—しかし、アメリカ人は確かに、目の覚めることをやった！ 彼らはヨルダンの空港と紅海から攻撃した。彼らは見事にロシア人を避けた！ 彼らは相手が怖かったのだ！

—それがどうした？ そうは言っても、彼らは、ロシアの同盟国を爆撃して、全く罰を受けていないだろう。

—あなたは、まさかこう言いたいのではなからうな？ ロシア人は、一人の死者も出なかったこの爆撃に対して、アメリカを相手に戦争を始めるべきだったと？

—いや、もちろん、そうではない。しかし、ロシア人は、どんな行動も取らなかったことによって、未来の攻撃を阻止することを怠ったとは言える。

—しかし、**ロシア人に何ができた**だろうか？

そう、それは正しい質問だ！

もう少し、それを細かく吟味しよう。大ざっぱに言って、ロシア人は、3種類の報復措置を選択できる——政治的、経済的、軍事的。しかし、そのそれぞれは、控えめに言っても、現状では問題のある、特定のセットの前提条件を伴う。

[訳者：著者はこれについて、3つの項目を「前提条件」と「現実の状況」にわけて、表を作り、具体的に論じているが、これは省略する。]

これは実は、単純な1つの文章に要約できる：——アングロ・シオニストの世界制覇は、この惑星全体にとって脅威であるにもかかわらず、ロシアとイラン以外には、誰もこれに、まともに取り組もうとする者がいない。これは皮肉ではないか！

いわゆる「キリスト教西洋」は、自ら進んでシオニスト寄生虫の宿主になっている。そして、それとまともに取り組もうとする、勇気と道徳的誠実さをもつ者は、キリスト教（東方）正教と、ムスリムだけである！ 実にこのように、世界の栄光は移行していく（Sic transit gloria mundi）・・・

しかし、それよりもっと重要なのはこういうことだ：——アメリカのネオコンたちは、彼らが望んだであろうような、強力な攻撃を与えるのに成功しなかった、そして、アメリカの攻

撃は、考えられる限り情けないものだったが、そうした事実は完全に忘れる必要がある。**事実はまったく問題ではない。論理もまた問題ではない。問題は、どう感ずるかだけである！**

そして、どう感ずるかといえば、“我々”（アングロ・シオニスト支配者と彼らの奴隷たち）は、“アサドのケツを蹴ってやった”ということであり、もし“我々”がその気になれば、“もう一度でもやってやる”ということである。それが、アングロ・シオニスト世界制覇の現在のあり方、**幻想の帝国**の問題のすべてである。<https://www.amazon.com/Empire-Illusion-Literacy-Triumph-Spectacle/dp/1568586132>

それを理解するや否や、あなたはまた、トランプが正しかったということに、同意しなければならなくなるだろう：——それは「**完全な攻撃**」だった（再び、現実においてでなく、その周囲につくり出された幻想の世界において）。

そこで今、我々は一回りして元へ戻った。

アングロ・シオニスト世界制覇は、この惑星全体がひざまずいて、自分を崇拜することを要求する。ロシアとイランを除いて、あらゆる者たちが従順にひざまずくか、よくても、従順に目をそらしている。アメリカ人たちは、彼ら自身の幻想的現実において、ロシアやイランなど、いつでも、やっつけられると自信をもっている。イランは、彼らを止めるためにできることは、何もない。そしてロシアは、それができるとは言っても、我々の惑星全体の未来のリスクの上に、可能であるにすぎない。

そこであなたに言ってほしい——あなたは、本当に、これで終わったとお考えだろうか？

——以上